

大和田建樹の「明治文学史」は、明治二十七年十月に刊行されており、まとまった明治の文学史としては、最初のものである。叙述内容の面では、時代区分に、輸入時代（元一〇年頃）反動時代（一〇一―二五年頃）新聞時代（二五年以後）と記しているなど、今から見れば妙な処が多いが、とにかく筆者の生きてきた生々しい時代を扱っているので、個々の事象の説明にはなかなか生彩があり、したがって信頼感もたれる。ところが次のような記載がある。「英独二派の占領たりし小説界は、亦異様の方角よりして新思想を輸入せり。何ぞや。人間社会の出来事を哲学的に観察する露国小説の入り来りし事これのみ。（中略）蓋し二葉亭四迷氏は其紹介者の一人なりき。「都の花」に出たる「浮雲」「野末の菊」「国民の友」に出たる「流転」等は其傑作なりとす。「この「野末の菊」と「流転」とは、矢崎嵯峨の屋の作品であることは言うまでもない。その次に出了た高山樗牛の「明治の小説」（太陽・三〇年六月）には、その

ような大きな誤りはないが、松村操（号春風）と松村春輔とを混同して記している。この誤りは、岩城準太郎の「明治文学史」（明治三九年）にも踏襲され、また同四二年刊の「文芸百科全書」中の「日本文学・明治時代」（服部嘉香執筆）にも踏襲されている。村上文庫の「明治文学書目」によると、春輔の著作は明治十六年で終り、春風は十七年で終つていて、ほと

自 粛 弁

和 田 繁 二 郎

んど活躍期がひとしい。また春風は書店鬼屋（思誠堂）の番頭だが、春輔は「復古夢物語」「春雨文庫」等比較的著名な著書があるにもかかわらず生没履歴はほとんど不明である。本間久雄博士の「明治文学史」によろやく長州藩士であつたということが明かにされている程度である。如何にもこの二人

はまぎらわしい存在であることはたしかだが、大体、こういう古い著作は、執筆者がその時代を生きてきたのだから、資料的にたしかだと思われる。それでも、この有様である。別して、今日の文学史の書物に誤りのあるのは当然だと言えるかもしれない。

たとえば、角川文庫の「昭和文学史上巻」に、宮島資夫の「坑夫」を、宮地嘉六の作だとしている。また筑摩の全集の「現代日本文学史」では、宮地嘉六の「放浪者富藏」を宮島資夫の作だと書いている。

これらの誤りは、まず小さいものには違いない。あげつらう方が恥しいくらいなのだが、文学史だからといって、個々の文学現象が無視されてよいとは言えない。むしろ、個々の作品、作家を大切にすることによつて、これらの文学史は書かれねばならないと思う。こういうことを言うと、猛烈に自信があるようだが、決してそういう訳ではない。大いに自戒自粛のつもりで書いたのである。